

思い出の記

数珠を握りしめての赴任

ー内岡久吉先生を偲んでー

武庫川女子大学教授

梶原康史

勲四等の叙勲に浴し、これから悠々自適の日々をと願うときに、仏陀のもとに旅立ってしまった。人生八十年時代というのに古希そこそこで旅立つとは余りにも急ぎ過ぎます。早くこっちへ来いとおっしゃっているのでしょうか。それとも君はまだまだ仕事を残しているとおっしゃるのでしょうか。

大学のキャンパスなどで出遭った日々が蘇ってきます。このごろエコロジーについて研究しとるのや。一遍、議論したいなあ。先生は一足早いから、かないませんね。エコロジー。いわば生きものの哲学です。生物の生活と生きものの棲家である地球についての知識を統合した学問領域を論じようとされるのです。先生はその領域世界を仏教の曼陀羅と関連して話そうとされました。私にはついていけません。先生は私に問題を投げかけて自分で頭の中で論理を整理しておられるかのようなのでした。

高校紛争の最中、当時、最も荒れていた高校の一つ、尼崎工業の校長として赴任の辞令が先生に出ました。そのとき高校人事を担当していた私に、「骨だけは拾ってくれよ」とおっしゃったそのポケットに数珠を忍ばせて、それを握りしめての赴任であったのです。覚悟のほどが偲ばれ、思うだに泣けてきます。そして八鹿へ赴任した別宮さん、その前任の藤本先生も皆他界してご苦労願った当時が痛いほど甦ってきます。校長の椅子はまさに針の筵であったのです。

私たちの指導主事時代、高校入試選抜方法が改められ、思考力テストを創案しました。本間教育次長を中心に問題を工夫しました。その理系の問題のひねくり役が内岡先生でした。そして、思考力とは何か。教科構成における思考力とは何か。思考の枠組みを問うことには限界がありはしないか、やはり教科ごとの内容に即した思考も要るのではないかなど、あの当時、二人一緒になればよく論議しあったものでした。分かったようで分からない議論ばかりでした。

しかし、内岡先生はいつも別れ際に、議論していると楽しいなあ。また、やろうなど。内岡先生は、いつも私に難問（アポリア）を投げかけて啓発してくださる人でした。有難い先輩でした。

うっちゃんの思い出

千福 小林 民江

—兵庫県教育工学研究会の発祥の地といえば誰もが「千福」を思い浮かべるであろう。JR元町駅を下ってすぐのところ、この度の震災にも耐え残った千福。その女将、小林民江さんに内岡先生の思い出を語ってもらった。—

内岡先生！ 私は「うっちゃん」と呼んでましたけどお付き合いは古いですねえ。お客様というより家族同然でした。毎日のようにウチへ通いはって連れてらしたお客様の誰にでも「教育工学はここが発祥や」ゆうて私を紹介しはりますねん。気恥ずかしいやらうれしいやら…

そうやねえ。うっちゃんの思い出は限りがありません。

とにかく熱心でしたよ。ほんまに話ゆうたら、ぜーんぶ教育工学でしたわ。若い人、入れ替わり立ち替わり連れてきて。もちろん偉いさんもいてはりましたけど。喧々囂々と熱気に溢れてました。あのおりの酒豪ですやろ。そやけど愉快なお酒でしたね。どの人とも同じように話しかけて、一人だけぼつんと離れているような方はありませんでしたね。誰一人外れないようにしてはりましたんやろ。自分が先生や。ということなんて微塵もみせず、師弟の関係やのうて仲間ってとこでしたね。普通は持論を押し付けるけど、そんなありません。だからみんな思ったこと言える。遠慮なくしゃべる。リラックスしながら実りの多い話題ばかりでね。

それからね。何ちゅうても、ものすごい思うのは一人一人の持ち味、良さの引き出しはり方です。若い人が次から次へと質問する。思わず言いたくなるよう話しかけますねん。それで適切に答えて。難しいこともわかり易く。わかるまでとことんですわ。この人からはこんな質問があるやろうな。その答え、ちゃんと準備してたんちがいますか。それぞれの言いたいことを深く洞察していたんでしょね。よう勉強してはったと思います。たとえ質問が見当違いでも、相手が恥ずかしいと思わせない独特のムードがあってねえ。上手でしたよ。聞き出すのも上手いし、答えるのも上手い。それでもってどの人も長所ばかり引っ張り出すような感じですよ。若い人は自分が認められたといううれしさがありますよねえ。平等でした。

あの話術の見事さ、雰囲気は華がありました。もう、あんな人出ないんちがいますか？ほんまの教育者でした。

—女将に話を伺った小一時間。桜の満開を彷彿とさせるような華やいだ情景に包れたひとときでした。—

取材 本 眞規

教育工学研究会初代事務局長

渡辺次郎先生を偲ぶ

武庫川女子大学情報教育センター

井上和郎

全国的にもユニークな教育工学研究は、初めは工業高校を対象として発足した。その後、各方面からの熱心な要望があり、普通科高校へとその広がりを見るようになった。今日では、小・中・高校の各校種をこえ、また学科、教科の別をこえて、その取り組みが広がったことは、教育工学そのものの本質が、教育そのものであることを認識されてきたものと思っている。

研究会発足の当初は、教育工学という語からくる反発が非常に強く、一部の先生方を除いては、なかなか近より難しいものであるかのように考えられた。このような考え方の根底には、「教育を機械で行う」という偏見があったように思われる。

今にして思えば、研究会の発足は、決して順調なスタートとは言えなかった。そのような状況の中で、渡辺先生は初代の事務局長として、会長を補佐するとともに研究会の運営や研究活動に献身的な努力をされ、兵庫県教育工学研究会の礎を築かれたと言っても過言ではない。

内岡会長が提案された教育工学「教育は、機器を使用したり、プログラム学習をすることが目的ではなく、それを支える理論的根拠と、それに基づく実証的経験をおさえることにおいて、はじめて教育的創造が生まれるものである。」の理念を先生が受け継がれ、研究活動が活発化していった。

それをバックアップするような二つのプロジェクトが県教育委員会で始まった。その一つは、教育工学研究指定校制度であり、他の一つは、教職員の海外研修制度である。これらの制度は、他府県に先駆けて企画された画期的なもので、県内外から大きな反響を呼んだ。

研究指定校制度は、昭和42年度から毎年数校が委嘱されるようになった。予算の裏付もあって、兵庫県の教育工学に関する研究が名実ともに行われるようになった。私たち教育現場にいる教師にとっては、実にやりがいのある研究制度としてうけとめ、研究に熱中したものである。その後、先生は、県教育委員会指導主事として、教育工学研究の企画・立案そして指導に当たられるようになった。その当時、先生の講演で「教授・学習・時間」の概念が取り入れられ、教育と自主学習の要素を取り入れた教育システムの開発を力説されたことは記憶に新しい。

また、海外研修制度は、文部省の企画より早く県独自の研修制度がスタートした。教育に情熱をもつ教師を3ヶ月間外国に派遣し、新しい教育方法や施設・設備の在り方、またその運営や行政の対応等、教育改革のための教師養成が行われるようになった。先生も、その一員に抜擢され、米国の教育工学、特に産業教育を中心とした研究を行われた。その報告の一つとして、コミュニティ・カレッジの必要性をアピールされ、現在の生涯教育の道が開かれるようになった。

先生は、若くして他界されたが、兵庫県の教育工学の先駆者として、また教育改革の推進者としてのご活躍は特筆すべきであろう。最後に先生の生前のご功績に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。